

「土砂災害を考えて」

山口県 下関市立東部中学校 3年 きりた めいか 切田 芽花

どれくらいの人が、防災マップを見たことがあるだろうか。

防災マップとは、ハザードマップともよばれ、自然災害による被害を予測し、その被害範囲を地図化したものである。2000年の有珠山噴火の際に、ハザードマップに従い住民・観光客や行政が避難した結果、人的被害が防がれた事実があるようだ。

私たちは、この防災マップをどのように活用し、いつ起こるか分からない自然災害から命を守る行動をとることができるだろうか。

実際に、自分の住んでいる地域の防災マップを見てみた。その中には、指定避難所や土砂災害警戒区域、浸水想定内区域、主要な避難路などの様々な情報が示されていた。中でも、私がとても参考にしたいと思ったのが、平成11年台風18号による被害区域の記載である。この災害は父母の記憶にも新しく、多大な被害をもたらしたらしい。その教訓がこの防災マップに生かされており、貴重な情報だと言える。

その他にも、土砂災害の前ぶれ・避難方法や、災害への備えなどの役立つ情報が細かく示されていた。携帯電話が普及されている今日、防災メールの配信も行われているようだ。

私の家は、山の近くにあるので、大雨や長雨の時は、道路をうちつける強い雨にとっても不安を覚える。しかし、特別な行動を今までに一度もとったことがないのが現実だ。

災害が起きた時にどうするかも大切だが、災害が起きる前にできる事を考えてみたい。まず私が一番に取り組んだことは、防災リュックをつくることだった。食料品や日用品、安全対策のものを入れて、そのリュックの置き場所を家族で確認したのだ。これは、土砂災害に限らず、地震などの災害時にも活用できる。

次に、しなければならないと思ったことは、自宅だけでなく、学校やよく行く場所、家族の職場付近などの防災マップを確認し、避難場所や土砂災害警戒区域を知っておくことだ。

もしも災害が起きてしまった時は、何よりも落ち着いて行動しなければならないし、家族や近くの人と声をかけ合って一緒に避難しなければならない。しかし、どんなに頭では分かっている、いざという時にこの行動ができるのだろうか。私は正直不安に思った。

なぜ、人は危険が迫っているにもかかわらず、逃げ遅れてしまうのだろうか。谷山宏著「ドキュメント豪雨災害」によると、「避難情報を前提として、それに加えて、災害の危険性を自らのこととして認識できる場合に、避難行動につながっている」とある。つまり、人は自分の身に危険が迫っていると実感して初めて、恐怖心と共に避難行動へと動くのだ。また、「自分や家族が日々生活する場所、安全だと思っている生活圏が、危険地帯へと変貌してしまうのだ」ともあった。私たちが住んでいる所は、安全だ、大丈夫だという気持ちが、判断をにぶらせてしまうのかもしれない。小さな油断が大きな危険へと変わるということだ。常に、正確な情報を得て生活することが重要であると思った。

もしも、防災マップがなかったとしたら、自然災害が起きた時いったいどうなっていたのだろうか。死者や負傷者が今よりもっと増えていたであろう。また、防災意識をあらかじめ持つことがしづらく、実際に体験するまで防災リュックをつくることにさえいたらなかったであろう。防災マップをつくってくれた方々に感謝したい。

土砂災害を防止するために、様々な工事が行われていることが分かった。流れてくる土石流を受けとめる砂防堰堤や、大水が出た際に流れの勢いを弱め、下流に安全に流す渓流保全工といった工事が行われているようだ。他にも、草や木が生えていないような地面がむきだしになっている山は、どんどん土砂が勢いを止めずに流れ出してしまうため、斜面をコンクリートの枠や壁で固定したり、木や草を植えて山がくずれのを防ぐ山腹工とよばれる工事もあった。また、スマートフォンアプリなどで避難のタイミングを教えてくれるアプリもあることが分かった。このように多くの人々を

令和2年度 「土砂災害防止に関する絵画・作文」作文中学生の部 優秀賞（事務次官賞）

土砂災害から守るために、心強い対策に取り組んでいる方々がいることを決して忘れてはならないと思った。

傾斜が急な山が多い日本は、突発的に土砂災害が発生しやすい環境にある。土砂災害から命を守るために、気象情報をチェックし、周囲の状況を確認しつつ、いつでも避難行動ができるように危機感を持って、家族と共に備えようと思う。「『1000年に1回』は明日起こるかもしれない」という言葉を胸に刻んで、普段から地域の人々との繋がりを大切にして生きていきたい。この得た知識を周りの人に伝え、役に立ちたいと思う。